滋賀県教育会　令和６年度　教育実践奨励事業　優秀賞受賞

研究主題

地域への自信と誇り、愛着を深める教育活動の推進
～自他の生命を守る防災教育を通して～

大津市立堅田中学校　校長　人見 和宏

■本研究の要旨

地域と協働して防災教育に取り組み、地域への自信と誇り、愛着を深めることをねらいとして研究に取り組んだ。
特に［**互いの理解・信頼を深める視点**］と［**生徒の主体性・意欲を高める視点**］に重点を置いて、防災教育に取り組んだところ、災害時の自助、共助の点で効果的であり、関係者相互の理解と信頼が深まり、生徒の主体性や意欲が高まったことが確認できた。

※本冊子は、滋賀県教育会 令和6年度 教育実践奨励事業への応募原稿に、提出後実践した内容を加筆し、構成し直したものです。

【目次】

１　研究主題 2
２　主題設定の理由 2
３　研究仮説 3
４　研究の方法 3
５　主な実践内容および考察 3
（１）実践内容１ 学校夢づくりプロジェクト実行委員会による企画・運営 3
（２）実践内容２ 「ふるさと体験学習、葛川少年自然の家にて」 5
（３）実践内容３ 「防災集会、講演とクイズで学ぶ」 6
（４）実践内容４ 「避難所体験」 8
（５）実践内容５ 「防災フィールドワーク」 10
６　結論（得られた成果、今後の課題） 12

１　研究主題

地域への自信と誇り、愛着を深める教育活動の推進
～自他の生命を守る防災教育を通して～

２　主題設定の理由

（１）堅田学区と防災

我が国は自然災害が多発する地域に位置しており、近年も地震や火山の噴火、台風や豪雨、豪雪、竜巻などの災害にたびたび見舞われている。

堅田学区では昭和９年の室戸台風によって、浮御堂が倒壊するなどの被害が生じ、その翌日には堅田沖合で竜巻が発生しており、災害は決して他人事ではない。

また大津市水害ハザードマップによれば、堅田中学校は水害時に1.0m～2.0mの浸水が想定されており、大きな被害が生じることも予想される。

生徒が災害に対して適切に対応し、自他の生命を守ることができるよう、防災教育を進めることはとても重要である。

（２）堅田学区の現在

学区内には公共施設や商業施設、観光地などがコンパクトに集中し、道路や鉄道などの交通の便もよいエリアである。地域住民の自治意識は総じて高く、子どもの教育に寄せる期待は大きい。学校の教育活動にもたいへん協力的である。

一方、生徒たちは、自分たちが暮らす地域のよさや、大人に見守られているありがたさを実感できていない様子が伺える。

そこで、地域と協働して防災教育に取り組み、生徒と地域住民の方々との顔の見える関係を作り、共に活動することを通して防災への意識を高め、ひいては地域への自信と誇り、愛着を深めることが本研究のねらいである。

（３）防災教育のねらい

学校における防災教育のねらいについて、文部科学省の資料では以下のように示されている。[1]

> ア　自然災害等の現状、原因及び減災等について理解を深め、現在及び将来に直面する災害に対して、的確な思考・判断に基づく適切な意志決定や行動選択ができるようにする。
> イ　地震、台風の発生等に伴う危険を理解・予測し、自らの安全を確保するための行動ができるようにするとともに、日常的な備えができるようにする。
> **ウ　自他の生命を尊重し、安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、学校、家庭及び地域社会の安全活動に進んで参加・協力し、貢献できるようにする。**

[1] 「学校防災のための参考資料『生きる力』を育む防災教育の展開」、文部科学省、平成25年3月、8頁

本研究では上記３点のうち、「ウ」に焦点を絞って実践および研究を進める。特に本校の学校教育目標は「豊かな心を持ち、主体的・意欲的に活動する生徒の育成」であり、自他の生命を尊重する豊かな心を持ち、地域への自信と誇り、愛着を深め、地域の防災や安全活動に進んで貢献できる生徒像を目指したい。

３　研究仮説

次の２つの視点に基づいて実践を進め、生徒が地域への自信と誇り、愛着を深めていくことをねらいとする。

（１）［**互いの理解・信頼を深める視点**］学校・生徒・地域が、共に取り組む活動を積み重ねることによって、顔の見える関係を作り、相互の理解・信頼が深まり、ひいては災害時の結束力を高めることができるであろう。

（２）［**生徒の主体性・意欲を高める視点**］生徒の存在を、地域の防災を担う立派な担い手と捉えて、生徒の企画力を生かし、主体的に行動できる場面を設けることで、さらに主体性や意欲を高めることができるであろう。

４　研究の方法

防災教育に関わる教育活動を実施する際に、上記の研究仮説に基づいて取り組みを進め、行動観察やアンケート調査等を行い検証する。

５　主な実践内容および考察

（１）実践内容１　学校夢づくりプロジェクト実行委員会による企画・運営

①実施時期および対象　令和６年６月頃から　全学年対象

②ねらい

・防災教育を進めるにあたり、生徒の意見や発想を活かして企画・立案し、リーダーとなる生徒が主体的に行動できる場を設けることで、さらに主体性や意欲を高める。

③活動の様子

「**学校夢づくりプロジェクト**」は大津市教育委員会の事業で、子どもたちのユニークな発案に基づいて、地域・学校が力をあわせて創意工夫を凝らした夢のあるプロジェクトに取り組み、児童・生徒が主体的に学び、心豊かに生きていくことができる力の育成を目指すものである。[2]

本校の防災教育の実践内容のうち、後述する「**防災集会**」と「**避難所体験**」を学校夢づくりプロジェクトの取り組みとして位置付け、公募の実行委員会で企画・運営を行った。

大人がすべて計画するのではなく、全校生徒のために企画・立案したい、自分の力を活かしたいという生徒が主体的に行動できるよう、生徒の実行委員を募ったところ、８名の生徒が応募した。（１年生２名、２年生１名、３年生５名）

[2] 「学校夢づくりプロジェクト」https://www.city.otsu.lg.jp/soshiki/070/2402/o/61886.html

第１回実行委員会を令和６年６月 19 日に開催し、以下のような内容を確認し、どのように工夫していくかアイデアを出し合っていった。

第１回実行委員会での確認内容
・11 月下旬に行われる地域の防災訓練に合わせて避難所体験を実施する。
・避難所体験の際にかまどベンチを作り、被災時を想定した炊事を行う。
・できるだけ全校生徒が楽しく防災について学べるようにしたい。　など

その後、１～３週間に１度のペースで実行委員会を開催し、計画を具体化していった。なお、実行委員会は教務主任が主導的に指導しており、必要に応じて関係する教員が生徒のサポートに当たっている。

右写真のように生徒が司会進行を務めており、できるだけ生徒の主体性を活かして活動している。

■実行委員会の様子

実行委員会の生徒の声
私たちは、全校生徒が楽しく防災や地震、津波などの自然災害について学ぶことを目標としてきました。例えば、防災集会ではクイズ大会を開催するなど、どのように学べば覚えてもらえるかなどを放課後残って考えました。
なので、少しでも楽しいと思ったり、防災について学んだりできたらいいと思います。

④考察、研究仮説との関連

［生徒の主体性・意欲を高める視点］

・実行委員会は放課後等の限られた時間で行っており、短時間であるためにかえって効率的な議論ができている。実行委員会の生徒たちは、部活動や勉強など自分の時間を割いて自主的に参加しており、どの生徒もたいへん意欲的に活動し、自分たちのアイデアを活かすことができることに、とてもやりがいを感じている。
・さらに、自分たちが立案した諸活動に、参加した生徒が楽しく活動する様子を目の当たりにして、大いに達成感を味わい、新たな意欲が高まっている。

［互いの理解・信頼を深める視点］

・実行委員会の生徒は、避難所体験に向けた打ち合わせで、地域の関係者と出会う場面があり、自ずと青少年育成学区民会議や自主防災会、消防団などに携わる人たちの存在や活動内容に気付き、その雰囲気や意義を少しずつ理解していく。このような機会を通して、防災に関する地域の取り組みを知り、顔つなぎができていることが、いざという時に非常に役立つと考える。
・また地域の関係者の側にとっても、実行委員会の生徒と出会うことは、中学生の考え方や行動力などをご理解いただく一助となると考えられる。

■生徒と地域、教員の打ち合わせ

（２）実践内容２ 「ふるさと体験学習、葛川少年自然の家にて」

①実施時期および対象　令和６年 10 月 24 日、25 日　第１学年 132 名

②ねらい

・災害が発生した時の不便さを実感し、代用品を自作する方法などを知ることができる。

③活動の様子

・１泊２日の日程の中で、被災時を想定して炊事活動などを行った。
・主な内容＝新聞紙でスリッパ、お皿作り、間伐材を用いたスプーン作り、空き缶を利用したカレーの調理など
・生徒たちは調理用具などを手作りしなければならない状況に不便さを感じながらも、自然豊かな葛川の環境の下で、新鮮な気持ちで興味深く取り組んでいた。
・昨年度のふるさと体験学習に、学校運営協議会の委員２名が参加された前例があり、本年度も協力を依頼することとした。特に火を使う野外炊事への協力をお願いしたところ、学校運営協議会委員等、地域の方４名が参加され、当日はグループごとに取り組む生徒の様子を巡回して支援いただいた。

■新聞紙でスリッパ作り

■参加された委員の感想の例

・１年生の学年全体の雰囲気はおだやかで、みんなで相談しながら、かまどの火起こしなどに取り組んでいた。
・自分が中学生の頃は、グループ内で男女の対立などがあったが、今は男女の区別なくまとまりよく取り組めた。
・空き缶を使ってカレーを炊く活動に、生徒は積極的に取り組んでいた。調理することに手慣れた生徒がいる一方で、包丁の扱い、玉ねぎの皮むきなどに戸惑う生徒も見られた。
・火傷をする危険性のある場面は先生が作業するなど、安全面への配慮が見られた。

④考察、研究仮説との関連

［互いの理解・信頼を深める視点］

・４名の方々には、あらかじめ活動の内容やねらいをご理解いただいた上で、生徒の様子の見守りをしていただいた。生徒の様子を通して、現代の子どもたちが、調理や火おこしなどの手作業にどれくらい慣れているか、また生徒同士の協力が必要な場面で、どのように問題を解決していくことができるのか等を実感していただくことができた。

■生徒と委員が共に調理

・また火を使う場面において、教員がどのように安全を確保しながら、生徒に委ねられる部分は試行錯誤させ、気付きや学びを促しているか、学校の指導のあり方の一面を理解していただくことができた。

・駆けつけてくださった学校運営協議会委員等、地域の方を、学年主任が生徒に対して紹介し、学校と地域が連携して防災教育を進めていることを生徒が理解できるよう促した。日常的に登下校の見守り等で委員と顔馴染みの生徒もおり、学校を遠く離れた場所まで地域の方が来てくださったことで、安心して活動に取り組む様子が見られ委員への信頼がより深まることとなった。

■顔の見える関係作り

（３）実践内容３ 「防災集会、講演とクイズで学ぶ」

①実施時期および対象　令和６年 11 月 13 日　全学年 384 名

②ねらい

・防災に関して取り組む市役所の部署の活動、および大津市や堅田地域に必要な災害への備えを知る。
・実際に被災地に赴いた市役所職員の支援の様子を学ぶ。
・クイズを通して防災に関する基礎的な知識を楽しく学び、防災への意識を高める。

③活動の様子

・大津市総務部危機・防災対策課の職員による講演会（30 分）を開催し、「地震災害に備えて」「能登町での避難所運営支援の実際」などについて学んだ。

■危機・防災対策課のスライドより

・続いて実行委員の生徒による防災に関する三択クイズ大会（15 分）を行い、楽しみながら防災について学んだ。全校生徒も和やかな雰囲気で協力的な姿勢で参加できた。

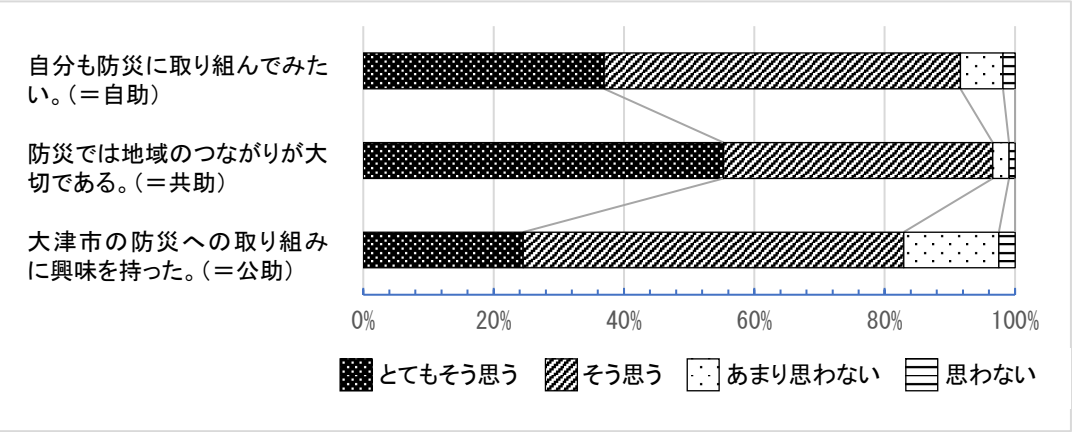
■クイズに楽しく取り組む

■生徒の感想の例

・能登半島地震で避難した人々の、生活の様子や一日のスケジュールなどがわかった。私と同じくらいの年齢の人たちも協力して体育館の掃除をしているということも知った。
・滋賀県が災害が少ないので、かえって気が緩んでしまって災害の時に何もできなくなる確率が多いことを聞いて、改めてそうだなと思った。いつ起きてもおかしくないことだと考えて、意識して防災訓練などに取り組むことが大切だなと思いました。
・災害救助では自助・共助・公助のうち自助と共助が一番多いことを知った。災害で助か

ったり助けたりするためにはもっと地域のことを知って、どこに誰が住んでいる、ここは安全などを知ったりする事が大切だと思った。
・私たちが普段生活している学校が、災害が起きた際地域の人の生活場所になることと改めて実感し、もし自分が学校に避難したら、学校の構造をよく知っている身として困っている人を助けたいと思った。

■生徒のアンケート（回答 322 名）



防災集会後に実施したアンケートは上記のとおり。自助、共助、公助に関わる設問に対して、特に共助の必要性について意識が高まっていることが明らかになった。

大規模な災害が発生した時には、膨大な被害が生じるため、行政のみの対応では不十分であり、また規模がそれほど大きくない場合も、生死に直結する発災直後の時間帯は、何より被災者自らの自助と共助が必要になると言われている。[3]

生徒がこのような意識を持つことができたことは、たいへん有意義なことである。

④考察、研究仮説との関連

［生徒の主体性・意欲を高める視点］

・この防災集会は、当初計画になかったもので、実行委員会の発案によって実現した集会である。実行委員の生徒は、次の実践内容３で触れる「避難所体験」が３年生のみを対象にしたものであり、２学期中に１、２年生が防災について学べる機会を設けたいという意欲を持って企画・立案し、職員会議での承認を経て実現に結びついた。本校教員の中で、生徒の主体性や意欲を応援したい雰囲気が高まっており、実行委員会の生徒たちの熱意を後押しした形である。

・当日の趣旨説明や司会進行、講演に対する謝辞、クイズの運営などをすべて実行委員会が担った。三択クイズはクラス対抗で行い、参加した全校生徒も協力的な姿勢で臨んでおり、大いに楽しんでいた。実行委員会の生徒も達成感を味わっていた。

■講演への謝辞を述べる生徒

[3] 「ぼうさい　平成 22 年 3 月号」、内閣府（防災担当）、9, 10 頁

（４）実践内容４ 「避難所体験」

①実施時期および対象　令和６年 11 月 30 日　第３学年 129 名、地域の関係者約 130 名

②ねらい

・避難所の役割や運営方法を知ることができる。

・災害発生時に自分の身の安全を守り（自助）、地域や周囲の人たちと協力して助け合う（共助）という考えをもち、災害に備えることができる。

③活動の様子

・生徒は５つの班に分かれて、避難所の運営や炊き出しの準備を行った。

かまどづくり班	ブロックでかまどをつくり、火の管理をする。
調理班	炊き出しの下ごしらえと調理。調理後のなべの後始末。
食器班	牛乳パックでスプーン、新聞紙でお皿をつくる。
はんごう班	はんごうでお米を炊く。調理後、はんごうを洗う。
整理券班	保護者や地域の方を安全に誘導し、炊き出しの食券などを配る。

・かまどについては、当初かまどベンチを設置する方向で計画を始めていたが、かまどベンチ周辺が被災すると使用できなくなってしまうことが懸念されるため、コンクリートブロックを持ち運んで設置する組み立て・解体方式とした。

・実行委員会の生徒は、開閉会式の運営と、配慮の必要な人が使うことを想定し、福祉テントの設営を担った。

・この避難所体験は堅田学区の防災訓練に合わせて、訓練の一部に参画する形で実施したものである。当日は自主防災会や消防団、医療機関など、地域の関係者約 130 名が参加され、多くの方が中学生と共に活動された。

・地域の関係者は並行して止血法・包帯法、AED、防災ポーチの作成、起震車体験、煙体験などの訓練を実施した。

■牛乳パックでスプーン作り

■地域の方と調理

■かまど作りと火の管理

■福祉テントの設営

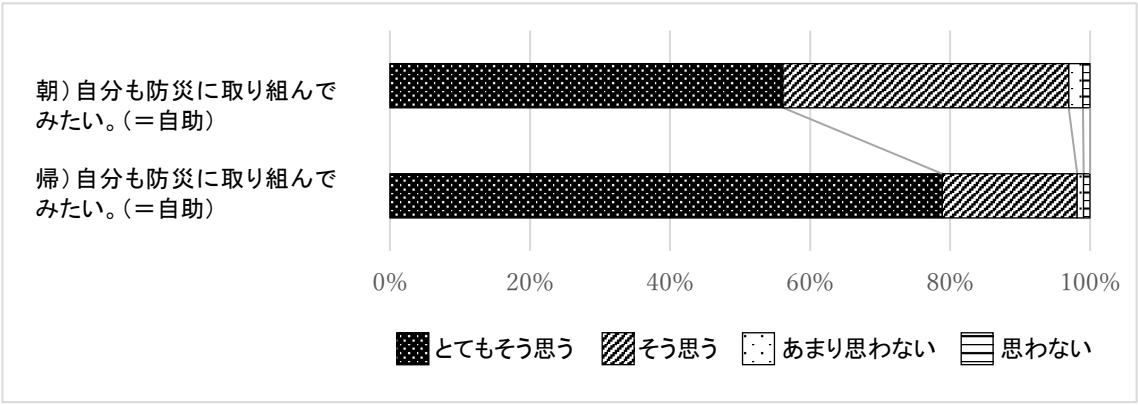
■参加者全員でカレーを味わう

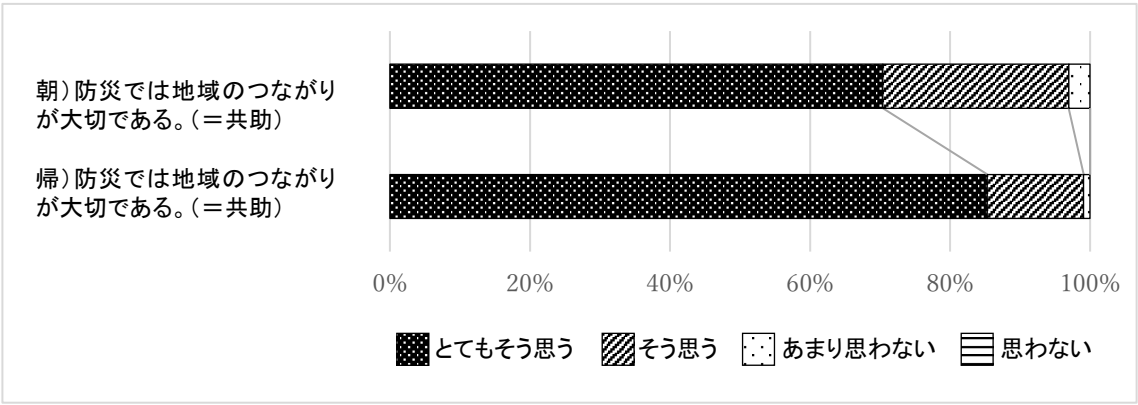
■生徒の感想の例

・地域の人同士のつながりが大事だと思いました。防災やヨシ刈りなどのボランティアに参加して、堅田の人たちと関わる機会を増やしていきたいと思った。
・地域の人が気軽に参加できて、生徒と話し合う機会ができたらいいなあと思います。部活動の時に知り合った方が参加されていてうれしかったです。
・地域の人と協力して無事にカレーを作ることができてよかったです。実際に災害が起こった時も今回のように協力して、少しでも避難所に貢献できたら良いなと思います。

■生徒のアンケート（回答 98 名）

避難所体験当日の朝と帰りに実施し、体験前後の変容を捉えた。





避難所体験後には、自助、公助への意識がともに向上した。ここでも特に共助への意識が高く、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的な回答が、ほぼ 100%を占めている。

④考察、研究仮説との関連

［互いの理解・信頼を深める視点］

・かまど作りやカレーの調理など、教員と生徒だけでは実施することが困難なことも、地域のご協力で達成することができた。事前の打ち合わせ時に、実際にコンクリートブロックを用いてかまどを作り、当日に向けての期待感を実行委員会の生徒、地域の方々と共有で

きて、何よりも心の距離が近づいたことを実感した。
・生徒たちは若さと元気があるものの、実際には地域の方に手助けいただく場面なども多く、「調理の時に忘れていたカレールーを刻んでいただいて、地域の方がいないと成功することができませんでした」、「なべの焦げが取れなくて苦戦しましたが、地域の人の手伝いもあってきれいにできました」、「災害が起こった時は、地域の人と協力することが大切だと改めて感じました」など、まさに顔の見える関係により、お互いの理解・信頼が深まった。

［生徒の主体性・意欲を高める視点］

・実行委員会は、当日までの準備段階で、炊き出しでのメニューについてのアンケートや、５つの班の役割の説明資料作成、開閉会式の原稿作りなどに取り組んだ。教員、生徒以外の地域関係者が多く参加される場で司会進行することなどを経験し、さらに自信を深めていた。
・３年生の生徒たちは、４つのクラスでもっともおいしいカレーを作りたいと意気込み、たいへん意欲的に活動していた。また役割ごとの５つの班で、それぞれが責任を持つとともに、手の空いた生徒は他の班を手伝ったり、クラスを超えて協力したりするなど、主体的に行動する姿が見られた。

（５）実践内容５ 「防災フィールドワーク」

①実施時期および対象　令和７年１月 28 日　第１学年 133 名

②ねらい

・災害が起きた時に共助の役に立てるよう、自分たちが居住する地域の防災活動や防災施設等を知る。
・防災活動や防災施設等について地域の自治会の方から直接説明を聞き、自分たちが暮らす地域のよさや、ありがたさを実感し、お互いの信頼関係を深める。

③活動の様子

・生徒は学校から 14 の自治会へ移動し、施設の見学や地域の方からの講話、質疑などの実習を１時間程度行った。
・実習の内容は、防災倉庫の位置や保管物資の説明、一時避難場所、消防ポンプやＡＥＤ、公衆電話の確認などである。
・地域からは、自治会会長や自主防災会員、消防団員など、合計 25 名の方々に協力いただいた。

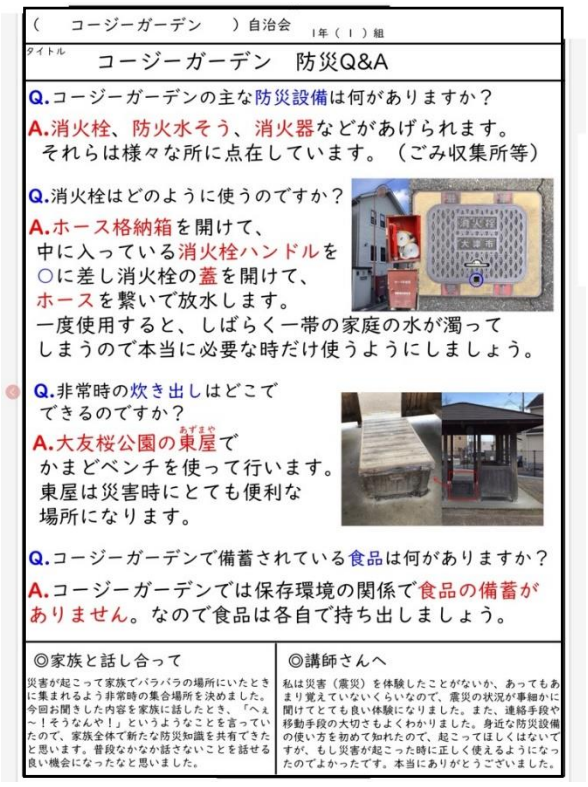
■自治会の防災設備について、現地で地域の方から直接説明を聞く。

④考察、研究仮説との関連

［互いの理解・信頼を深める視点］

・生徒は自分の居住地の自治会に、どのような防災施設があり、どのように使用するのか等を知らない。生徒が地域の自主防災会等の方から直接説明を聞くことは、被災時の備えや対応方法などについて知識を得るだけでなく、相互の理解・信頼が深まる点においても意義深いことである。

・事後学習のレポートに記載する項目の１つに「家族と話したこと」を設けた。これは、生徒が学んだことを家庭内で話すことにより、生徒自身が学んだことを確かなものにするとともに、家族の防災意識を高めることをねらいとしている。地域関係者と生徒との信頼関係を家族にも広げる波及効果があると考えている。



■事後学習レポートの例

６　結論（得られた成果、今後の課題）

得られた成果

［互いの理解・信頼を深める視点］

・「防災」をテーマにした教育活動に学校・生徒・地域が共に取り組む機会を通して、さまざまな年代の人たちがお互いの得意なこと、不得意なことも含めて相互に理解し合い、信頼感を深めることができ、実際の災害の時には一致協力したいという気持ちを新たにすることができた。

［生徒の主体性・意欲を高める視点］

・生徒による実行委員会を活かし、活躍できる場と機会を十分に確保することで、生徒の主体性や意欲を大いに高めることができた。まさに本校の学校教育目標「豊かな心を持ち、主体的・意欲的に活動する生徒の育成」を実現している姿である。

［大人の主体性・意欲を高める視点］

・学校と地域がともに防災の取り組みを盛り上げることができたのは、学校運営協議会で議論する下地があってこそである。学校運営協議会をはじめとして、広く地域や行政との関係を築くために、今後も常日頃の関わりを大切にしていきたい。

今後の課題

・たくさんの参加者を伴う活動は、ともすれば実施することそのものが目的化してしまうことが危惧される。生徒の主体性や意欲を高める意図を明確にしないと、生徒による実行委員会も、単なるイベントの実務スタッフになってしまうかもしれない。何のために実施するのか、達成するべきねらいは何かを常に見失わないようにし、関係する方々への十分な説明が必要である。

・生徒の主体性・意欲を高めていくために、子どもの力をどう伸ばすことができるか、これは子どもの側だけの問題ではなく、私たち大人側の姿勢によるところが大きいと考える。今後も生徒の可能性を信頼し、生徒の良さを十分に伸ばしていける包容力のある学校にしていきたい。

令和７年（2025 年）３月７日(金)

大津市立堅田中学校

〒520-0242
滋賀県大津市本堅田三丁目２２番１号
電話　077-572-2165

※共に教育活動に携わっていただきましたすべての関係者様に深く感謝いたします。
※プライバシー、肖像権保護のため、解像度の低い画像をしている部分があります。

学校教育目標：豊かな心を持ち、主体的・意欲的に活動する生徒の育成

↑**５つの青色ライン**：校歌にある「紺碧（こんぺき）」＝深く濃い青色をベースにして、創立当時の組合立滋賀中央中学校が堅田・仰木・真野・伊香立・葛川の五つの地域で成り立っていたことを象徴的に表しています。